

藤小 学び合い学習について

R4年10月17日
藤小学校 教務主任

W 藤小学び合いスタンダード リーフレット.docx

1 本校の実態

- ・全国・県の学力調査の結果から、本校は中位(特に中位の上位部)層と下位層が多く、上位層が少ない。
- ・特別な支援を必要とする児童が非常に多い。(「見守る子」参照)
- ・自主性が高い(決まっていることには進んで取組む)児童は多く、主体性が高い(決まっていないことを自分で考えて取組む)児童は少ない。
- ・学び合い学習を推進しているが、本校のスタイルが確立されていないため、学び方の積み上げができていない。
- ・近年若手教員が急増し、ベテラン教員が減少しているため、若手の育成が急務となっている。

2 ねらい

- ・佐藤学氏が提唱する「学びの共同体」のスタイルを採り入れることで、「藤小の学び合い」のスタイルを確立していく。
→資料 W「藤小学び合いスタンダード」の確立を目指して.docx)
- ・「聴き合う関係」をつくることで、教室の全ての子供たちが学びに参加できるようにする。
- ・「ジャンプの課題」に取り組ませ、質の高い学びを発生させることで、学力中位層の子供を 上位層に引き上げたり、下位層の子供の学ぶ意欲を高めたりする。
- ・「ジャンプの課題」を作成することで、深い教材理解が可能となり、全職員の専門性を高める。

3 学びの共同体とは

『技術や方式ではなく「ヴィジョン」と「哲学」と「活動システム」による改革である』

(1) 学びの共同体のヴィジョン

- ① 子供一人一人の学ぶ権利を保障する。(子供が一人残らず学習に参加する。)
- ② 子供たちが学び合い、教師たちも学び合い学びの専門家として成長する。
- ③ 子供と保護者と市民から信頼を獲得し、連帯する。
〈一人残らず学びの主権者となる民主主義の社会を目指す〉

(2) 3つの哲学

- ① 「公共性の哲学」...全ての教師が年1回以上は教室を開き、同僚性育てる。
- ② 「民主主義の哲学」...異なった人間同士が共生できる場所となる。
- ③ 「卓越性の追求」...どんな条件であっても最上のものを目指す。
〈これらの実現を「聴き合う関係」による対話的コミュニケーションに求める〉

(3) 活動システム

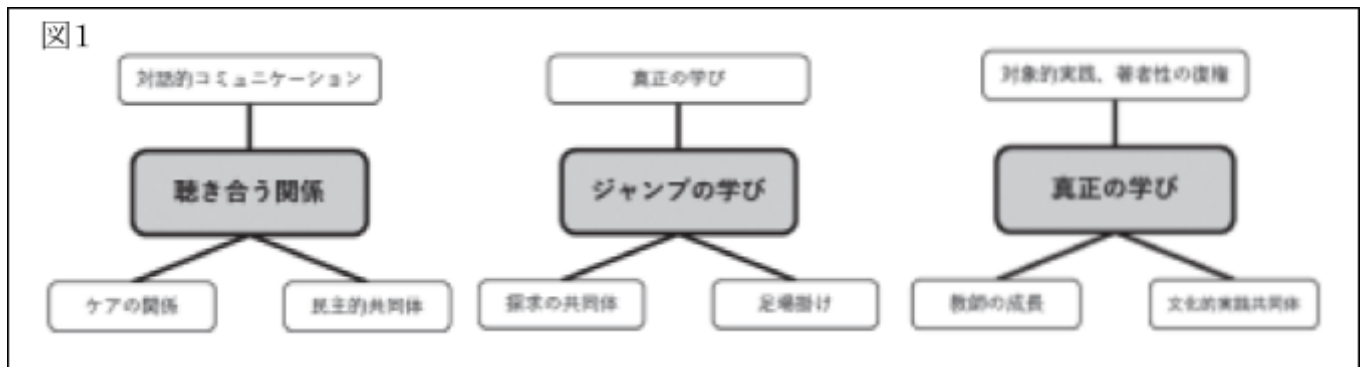
- ① 「協同的学び」の実現...平等・公正な学び。
- ② 「同僚性」の構築...校内において教師が授業を開き学び合う。
- ③ 「学習参加」の実践...保護者や市民が改革に参加する。

4 協同的学びを通じて養われる資質(4点)

- ① 主体的で自律的な学びの構え
- ② 確かで幅広い知的習得
- ③ 仲間と共に課題解決に向かうことのできる対人技能
- ④ 他者を尊重する民主的な態度

5 質の高い学びの要件

「聴き合う関係」「ジャンプのある学び」「真正の学び」の3つの要素が必要
 ※それぞれが持つ機能は下の図1を参照。



1つ目の「聴き合う関係」は、「学び合う関係」とも言われ、その機能は3つ(対話的コミュニケーション、ケアの関係、民主的共同体)ある。佐藤学氏によると、協同学習の出発点は、わからない子供が「ねえ、ここどうするの?」という問いを他の子供に向けて発したときで、これをきっかけに子供同士の「対話的コミュニケーション」が始まる。分かっている子は、他の子供に分かりやすく説明しようとする過程で「分かり直し」を経験する。一方、わからない子はその援助を受けて、懸命に思考し、1人で学ぶことの限界を超えることができるという。このような互恵的関係が「ケアの関係」である。このような学び合いでは全ての子供が学習の中心にあり、このような学習コミュニティを「民主的共同体」と呼ぶ。

2つ目の「ジャンプの学び」とは、「創造的・挑戦的学び」と言われる発展的な学習のことで、その機能は3つ(探究的共同体、足場掛け、真正の学び)である。まず、「学びの共同体」の協同学習は「共有の学び」と「ジャンプの学び」の2つの段階で構成される。「共有の学び」は、全員が教科書の内容を理解することを目的とした基本的な学びのことである。そのあとに行われる「ジャンプの学び」は発展的な学習のことで、どの子供も学びに夢中になれるような認知的にレベルの高い課題に取り組むことを指す。このような学びを通して子供たちは興味関心を共有でき、この状態が「探究の共同体」である。ジャンプの課題をこなすには子供同士の助け合い、すなわち「足場掛け」が必要である。このように達成される教科の本質に即した学びを「真正の学び」という。

3つ目の「真正の学び」とは、「教科の本質に則した学び」のことで、3つの機能(対象的实践・著者性の復権、文化的実践共同体、教師の成長)を持つ。子供が「教科の本質に則した学び」を達成するには、学びの対象となるテキスト(教材文)で著者が何を伝えようとしているか正確に読み取ることが重要である。このように教材文やその著者に重きを置く姿勢を「対象的实践、著者性の復権」と呼ぶ。このような姿勢で子供たちが「対象世界との出会いと対話」を行うと、新たな文化的価値観の発見が起こる。「文化的実践共同体」とはこのような実践が行われる学習コミュニティのことを指し、教師はその手助けを行うことで成長することができる。

6 「学びの共同体」の基本的な考え方を採り入れた具体的な方法

①学級経営において

- ・教師と児童が信頼し合い、柔らかな人間関係を築く。

②教材研究において

- ・子供に学びが生まれる授業デザインを作る。そのための教材研究と準備を充分に行う。
- ・「共有の課題」(動機づけの課題)から、「ジャンプの課題」(質の高い課題)への授業展開を考える。

※ジャンプの課題の作成が肝要。

- ・学びが深まる板書を工夫する。

③授業における教師の役割

- ・テンションを下げて「柔らかな」口調で話す。
- ・児童の発言を中心に、「聴く」「つなぐ」「もどす」を繰り返す。(教師が教え込まない。)

④協同的な学びのために

- ・互いに聴き合う関係を作る。
- ・発表はあくまでも自分の考えを述べさせる。(考えをグループでまとめない。)
- ・「分からない」と仲間に訊く。訊かれたら誠意を持って応え、相手が分かるまで教える。
- ・教師は、グループと一斉を切り替えるタイミングを効果的に使う。

⑤効果的な学習形態

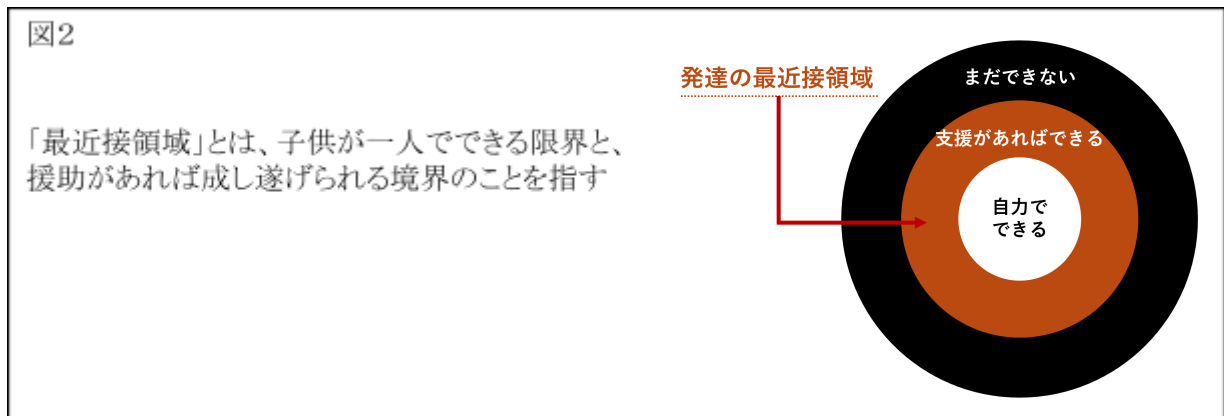
- ・コの字型 ※コロナ禍の収束後実施(R4年度は試験的に第3学年で実施)
- ・グループ学習ではT字型(原則4人で、男女混合とし男女がクロスする座席配置が基本)

⑥ペア・グループ学習の実施

- ・基本的には常に友達とつながってよい(自力解決は「独り解決」ではない)
- ・低学年はペア学習が望ましく。3年生以上はグループ学習が望ましい。

7 ジャンプの課題について

- ・学びの共同体では、通常、「共有の学び」(教科書レベル)と「ジャンプの学び」(教科書以上のレベル)の二つの課題で協同的学びを組織している。両者はともに、そのほとんどが「発達の最近接領域」(※ヴィゴツキーの理論:下図2参照)の範囲内に位置付いている。しかし、時には「発達の最近接領域」を超えて学びの課題が設定される場合もある。
- ・「ジャンプの課題」は上位層の子によって有意義であるだけでなく、下位層の子にとっても有意義である。なぜなら、下位層の子は「ジャンプの課題」においていっそう夢中になって学び、たとえジャンプの課題は達成できなくても、基礎的概念を獲得している。
- ・下位層の子が、「共有の課題」より以上に「ジャンプの課題」において夢中になって学ぶのは、驚くべき事柄である。



8 ジャンプの課題づくりは、なぜ難しいのか？

- ・ジャンプの課題づくりを難しくしている要因はいくつかの要因が絡み合っている。
 - ①教師の教科の教養(学問・芸術)が不足している。=教科書しか教えられない。
 - ②ジャンプの課題を、その学年の教育内容の範囲内で探している。(1学年上の内容に良問がある場合がある)
 - ③「(3分の1は)正解にいたらなくてよい」という認識が欠如している。あるいは、それが「怖い」。「すべての子供が分かる授業」がいい授業ではない。「すべての子供が分かる授業」よりも、「すべての子供に学びが成立する授業」がいい授業である。
 - ④ジャンプの課題を「難しい課題」と誤解している。
 - ⑤正しいジャンプの課題は一つしかないと誤解している。

9 授業の基本技法＝新しい授業研究は<デザイン>と<リフレクション>

- ①「プラン」と「デザイン」の違い。「プラン」は授業前に決定される。「デザイン」は授業過程においても構成される。
- ②デザインは単純(simple)に省察と関わりを繊細(sensible)にする。デザインがシンプルな人ほど、授業が緻密で子供と関わることもできる。デザインが複雑であればあるほど、子供との関わりや授業の展開が粗くなり、雑になる。

③<始まり>がすべて＝優れた教師は始まりにすべてをかける。

④学びの課題の<デザイン>と学びの省察<リフレクション>が新しい授業研究の在り方。

学びの作法

- ・ わからないとき、自分から仲間に訊く
- ・ 訊かれたら相手が納得するまできちんと説明する
- ・ わかった人から「教えてあげる」とは言わない



<話し合いの基礎>

- ・ 人の話を互いに聴き合おう
- ・ 思いやりをもって聴こう
- ・ 理由をもって、自分の言葉で話そう
- ・ 考えながら聴こう

